びわこ文化公園植物だより〔β版〕

コブナグサ　イネ科

・学名 *Arthraxon hispidus*

・園内各所に自生、花期は9-11月

　コブナグサは水辺やその他の湿った場所に生えるイネ科の一年草です。茎は枝分かれしながら地面を這って広がり、密生します。夏の終わり頃から、枝の先ごとに細くて固い茎を伸ばし、その先に長さ3～5cmほどの穂をつけます。

コブナグサは意識しなければ気づくこともないような地味な草ですが、じつは日本では染料として非常に重要な植物でした。とりわけ有名なのは八丈島名産の絹織物、「黄八丈」です。八丈島は東京の南、約300kmの沖合に浮かぶ火山島です。ここで生産されてきた黄八丈は、コブナグサで黄色に染めた絹糸を地に用い、黒や褐色（樺色）で格子や縞を織り出したものです。江戸時代後期には庶民の着物の生地として人気だったそうです。時代劇でもお茶屋の娘さんは黄八丈に前掛けのイメージがありますね。八丈島のコブナグサは栽培化されており、このへんで見られるコブナグサよりずいぶん大きいものだそうです（石神ほか2001年、『雑草研究』）。

染料植物としてのコブナグサは、「カリヤス」と呼ばれていました。標準和名でいうカリヤスはこれとは別種のススキに似た植物で、やはり古来、黄色の染料として用いられていました。こちらの名産地は滋賀県の伊吹山で、ここでとれるカリヤスは近江苅安とよばれていました。コブナグサとカリヤスの黄色の主成分は、「ルテオリンラムノサイド」という同じ物質

であることが知られています（毛利、2011年）。八丈島のコブナグサは、近江のカリヤスの強大なライバルだったのかもしれませんね。

　コブナグサは漢字で書くと「小鮒草」で、葉の形が魚のフナに似ていることに由来しているといいます。葉1枚だけを見てフナに見えるかといわれると苦しいような気もしますが、極細の茎に葉がついたようすが、全体として、釣り上げられたフナのように見えたのかもしれません。「小鮒釣りしかの川」と歌われたような、フナのいる小川の土手などによく生えていることも、フナに結び付けられた理由のひとつ

かもしれません。ともあれ、細長い葉をつけるものが多いイネ科の中でこんなに幅広くずんぐりした葉は特徴的で、一度見て覚えれば、もう忘れることはありません。

夏の終わりにみられたコブナグサの穂は白っぽい緑色でした。しかし、秋の冷え込みで紅葉に似た変化を起こすのでしょうか、今の季節のコブナグサの穂は、サツマイモの皮の色に似た、濃い赤紫色に染まっています。

（龍谷大学農学部・小栗栖潤／川北暁仁／
岸涼子／日下隼／三浦励一）

❁ コブナグサは園内のあちこちに生えていますが、とくに ここ や ここ には多くみられます。
（クリックで Google マップにリンク。10m 程度の誤差が出ることがあります。）